



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成15年10月10日
通巻34号

第7回下水文化研究発表会・開催案内

研究発表論文の募集に際しましては、ご協力ありがとうございました。おかげさまで20編以上の貴重な論文が集まりました。同封の開催要領を決定いたしましたので、ご案内いたします。多くの方の参加をお待ちしています。

開催要領にも記載いたしましたが、参加ご希望の方は11月7日(金)までに、FAXか電子メールで本会事務局までお申込みください。なお、会員以外の方の参加も自由ですので、今回のテーマならびに発表論文に関心のある方をお誘いいただければ幸いです。

参加費は前回と同様無料ということにいたしますが、講演集をお求めいただくことにいたしました。日ごろご支援いただいている会員の方と会員でない方に差をつけさせていただきます。その場での入会も歓迎いたします。

本会では、研究発表会をお手伝いいただけるボランティア

アスタッフを募集しております。当日の会場スタッフ、海外からの参加者のエスコート、サイトビジットの提案及び案内など、申し出ていただければ幸いです。

また、本企画を準備するにあたり、海外よりの講演者をお迎えする費用等につきまして、NPO法人モバイル・コミュニケーション・ファンドが募集するドコモ市民活動団体助成金を申請しておりましたが、このたび採択の通知がありました。この場でご報告させていただきます。この助成金を申請するにあたり、今回の企画は本会が、途上国の衛生改善のために具体的に行動をスタートするためのキックオフ的な意味をもつものであることを強調しました。研究発表ということだけでなく、ここでの議論を通して、行動に移ろうという趣旨をもった研究発表会であることを共通認識としていただければ幸いです。

草の根協力事業とNPO

酒井 彰(運営委員会代表)

パートナーシップということがよく言われるようになりました。日本語で「協働」と言うこともあります。公共事業の構想などでは、このどちらかの言葉が必ずキーワードのひとつになっているようです。行政から見ればパートナーシップの相手は、市民やNPOということになるわけですが、まだ、行政の決めたことに協力してほしいというところが本音なのではないでしょうか。

パートナーシップと言うからには、お互いが主体的に活動の場に参加しなくては、はやりの言葉への言い換えに過ぎないことになってしまうと思います。NPOが行政と協働するなら、NPOの知見や経験、市民の立場からの発想が行政の施策や事業に活かされ、成果としてその事業がより市民が求めるものに近くなってはじめて本来の意味となるのではないかと思います。最近では、NPOの力を認め、共同事業というスタイルも現れようとしています。こうなれば、NPOの収入にもつながり、NPOにとって歓迎すべき流れであると言えます。

こうした動きの背景には、公的な事業が市民の役に立っているか、市民の求めるものとの乖離がないかが問われるようになったからであろうと思われます。ここでは、海外の事例で考えてみましょう。

最近訪れたバングラデシュでは、飲料水に利用しているハンドポンプのチューブウェル(管井戸)が、ヒ素で汚染されていることが今から10年前に判明しました。いろいろな数字があるのですが、ヒ素汚染による発癌リスクに曝されている人口は3000万人とも、それ以上とも言われています。汚染が判明してから、実に多様な「対策」が、この国に持ち込まれました。政府も遅ればせながら調査と対策に取り組んでいます。ヒ素の対策は、基本的に水源

を変えるか、井戸水からヒ素を除去するかです。しかしなかなか決定打が見出せる状況にはありません。

今回訪問した地域で強く感じたのは、地元の要望や意見を聞かずに進められた「対策」が多いことです。かってにヒ素を除去するフィルターが置いていかれ、しばらくはデータが取られていたが、そのうちぱったりと誰も来なくなり、データも知らされないで、そのまま使っているのかもわからないといった状況があります。また、代替水源のなかで、浅井戸(ダグウェル)という案があり、政府はこれを推進していますが、周辺のトイレや排水の影響を受けやすいものです。にもかかわらず、地方行政はただダグウェルを掘ってどう管理するのかも十分伝えていないようです。このようなことで、失敗が繰り返されるとすれば、資源の無駄であり、住民にとっては、ほとんど役に立ちません。

上記のような失敗を繰り返さないためには、地元の人がヒ素汚染のリスクを認知し、どのような改善



水面の上のトイレ
(Hanging Latrine)

第29回定例研究会のお知らせ

日本下水道文化研究会の第29回定例研究会を下記の要領で開催いたします。今回は、浄化槽に関する技術者の養成・調査研究を行っている(財)日本環境整備教育センターの佐々木裕信氏より、浄化槽について法的側面から語っていただくことにしました。ふるってご参加いただきますようご案内申し上げます。

記

演題：「浄化槽法制定の経緯と現状」

講師：佐々木 裕信氏

(日本環境整備教育センター 企画情報部長)

講演内容：浄化槽法は、浄化槽の製造から設置、維持管

理までの一連の体系を制度化した法律である。当初の目的は、単独処理浄化槽の適正管理にあったが、平成12年の法改正により合併処理浄化槽が浄化槽として規定され、従来のし尿のみを単独で処理する浄化槽の新設は原則的に禁止されるに至った。本講演では、この間の経緯を語っていただく予定である。

日時：10月31日(金)午後6時30分より

場所：東京ボランティア・市民活動センター 会議室
(セントラルプラザ 10階A会議室)

新宿区神楽河岸1-1 TEL: 03-3235-1171

JR、地下鉄 飯田橋駅下車徒歩1分

第24回・第25回し尿研究会例会のお知らせ

	第24回	第25回
日時	平成15年12月4日(木)18時30分より	平成16年1月16日(金)18時30分より
講話者・演題	平田純一氏(本会会員) 「日本人はなぜしゃがんで排便するのか」	楠林 勝二氏(古書店経営者) 「屎尿という文字の探求」
内容	便器の開発に携わってこられた講話者が、しゃがみタイプと腰掛けタイプの排便の仕方を比較し、日本人はなぜしゃがみタイプであったのかを探求するものである。	中国および日本の古典をひも解き、「屎尿」という文字のルーツを探し求めた結果を、原典を資料として解説していただくことになっています。
場所	東京ボランティア・市民活動センターセントラルプラザ10階B会議室(第24回)A会議室(第25回) 会場住所等は第29回定例研究会を参照してください。第29回定例研究会は、第23回し尿研究会例会を兼ねております。	

第22回し尿研究会例会を聴いて

鈴木 直子

平成15年9月5日、久しぶりに、し尿研究会例会に参加することができました。ここ数年残業が多い職場にありましたが、今春偶然にも会場である飯田橋のセントラルプラザ内に異動になり、多少の時間の余裕ができてきていたところ、7月の「ふくりゅう」で例会の開催を知りました。関野勉氏によるテーマは「トイレのグッズ」。思わず「やったー!」と喜んでしまいました。

というのも以前東京都下水道局で文化会機関誌の編集委員をしていたことがあり、トイレ空間の取材をきっかけに、トイレ関係の話には、とても興味をもっていたからです。

わくわくしながら会場に入ると、テーブルの上に様々なトイレのグッズがたくさん並べられていました。

「椅子穴開き型便器のミニチュアや糞型のルータイプを知り合いの方や友達に作っていただいた。」という話にまず驚きました。お店で購入するだけでなく、お金を払ってミニチュアまで作ってもらうなんて、本当にトイレ

グッズを愛していらっしゃるんだなあと感じました。

日本、中国、ヨーロッパの人形や飾り物のほか、ギリシアの尻拭き用海綿などのトイレ用品まで、「本当にいるんなものがあるんだなあ」と、感心しながら拝見させていただきました。

特に、イタリアのハイタンク洋便器のミニチュアは、長さが15cm位なのですが、持ってみるとズシリと重さがあるのがビックリ。値段も4,000円したとのことでもまたまたビックリ。作りも精巧なものでした。

また、製造をやめてしまったために今では手に入らない日本製のトイレトーパーといった貴重なものや、蓋を上げると放水される香港製の温水洗浄便座のおもちゃなど手の込んだものもたくさんありました。ウズベキスタンの排尿器は、ベッドに赤ちゃんを固定するために使われているものだそうで、文化の違いを知ることができました。

実物を実際に手に取らせていただきながらお話を伺

い、また、お話の後も手に取って見させていただいてとてもありがたかったです。

終了後の懇親会で、グッズを求めて海外に行くのではなく、旅の途中で『「ニオイ」のする方へ足を運ぶとグッズを売っているお店があったりする。』とのお話を伺いました。経験から来る勘もあるのですが、トイレグッズが関野さんを招いているようにも感じられました。

相思相愛のトイレグッズ。今回見られなかったものや今後新たにコレクションに加わるものを見せていただくのが楽しみです。関野さんどうもありがとうございました。

編集注：第7回下水文化研究発表会において、関野勉さんによるトイレグッズの展示を行います。

「沙漠の国の上下水道」講演会に参加して

国際協力銀行技術顧問 友野 勝義

3年余前三樹(小林)君がエジプトに長期専門家として赴任したと聞いて、「それはよかった」と思った。国内だけにいては知りえない問題、学習がたくさんある。文化・言語・モチベーションの違いで三樹君もかなり苦労したであろうと推察するが、今回の彼の講演は大変ユニークで魅力的なものであった。沙漠の国の上下水道の困難さは、通年で適度な降雨に恵まれているわれわれには想像が難しい。

最初の話題がエジプトの主要水源であるナイル川について、アスワン・ハイダムには流域に降る雨水のたった3.7%しか届かない。水は足りない、人口は増える、その一方水道料金はまともに取れない。下水道については、全戸が下水道に接続されていないので下水があふれる市街、ほとんどただ同然の下水道料金、過負荷で非効率の下水処理場等問題の多ことが報告された。

同様な問題はクラシカルな開発途上国だけでなく、旧ソ連圏諸国のような国でも公共インフラの荒廃が進みつつあり、その原因はほぼ共通している。公共インフラのための基本政策がなく、料金が不当に低く、維持管理が不適切で、更新はほとんど行われていない。肝心の料金の値上げは政治的な事情から非常に難しい。

こうした国々で、援助の目的として施設を作るだけでは遠からずプロジェクトは失敗に向かう。援助する側は施設建設と同時に、いかにそれを運営するか、つまり組織・法制度の整備についても援助・手助けする必要がある。「法制度の整備」には当然料金制度の改正が含まれるが、飲料水や下水道サービスが元来ただ同然で与えられるべきだと意識してきた住民を相手にする改革であるから大きな困難の伴うことは覚悟しなければならない。

報告

中川金治翁石祠建立募金の結果と今後の予定について

本会では、ふくりゅう31号でご案内いたしましたように中川金治翁の祠再建につきまして、募金活動に協力して参りましたが、中川神社再建委員会の稲場紀久雄様か

ら、8月23日付でお礼のメッセージと今後の予定についてご案内がありました。

この度は、中川金治翁石祠建立の募金にご協賛を賜り、誠にありがとうございました。中川神社再建委員会が八月二十日、丹波山村で開催されましたので、募金の結果と今後の予定をご報告を申し上げます。

募金は、二十日時点で目標額(百万円)を若干上回る見通しです。当初計画に多少の余裕を見込める状況になりましたので、今後石祠建立計画は順調に進むものと思われま

す。石祠製作は、合名会社竹原石材店の竹原教男氏(滋賀県長浜市)に依頼し、なるべく簡素で品位を備えたものにする方針を採ることになりました。問題は、重い石祠を標高千四百メートルを超える竿裏(サオラ)峠まで運び上げる方法です。石祠を無理のない範囲で分割し、地元で募った強力の方に運んでいただく方向で、具体的な調整に入る予定です。

石祠と合わせ、案内板等の製作も行います。竣工式と建立記念祝賀会は、十一月二十三日(予定)とし、当日はご協賛いただいた方々全員をご招待することになりました。ご招待状は、改めてお届け致しますので、あらかじめご日程にお入れいただきたく、お願い申し上げます。以上の通り、皆様のご協力により、中川金治翁石祠建立事業が円滑に進捗する運びとなりましたことをここに報告し、衷心より御礼を申し上げます。

稲場 紀久雄

バルトンと写真

金 文子

バルトン忌に初めて参加させていただきました。下水のことは何も分かりませんが、バルトンの写真家としての側面に興味を持っています。

バルトン旧蔵のアルバムではないか、と私が勝手に思い描いていた濃尾地震の彩色アルバムがあります。長崎大学古写真データベースで公開されていますが、私は今春、同大学附属図書館長岡林隆敏先生の御厚意で、実物を拝見することができました。そのアルバムに書き込まれた癖のある英文綴りを持って、奈良から青山墓地にやって参りました。きっと、バルトンの筆跡をご存知の方がいらっしゃるに違いないと。

結論は、「違う」でした。ガツカリでしたが、「違う」と分かったことは、私にとって大きな収穫でした。昼食時のレストランで気さくに質問に答えて下さいました会員の方々に感謝いたします。その席で、会報への投稿を求められましたので、以下私事を交えて、バルトンと写真のこと、とりわけ濃尾大地震の写真帖について書き留めてみました。

私は朝鮮古写真研究に志を立てて、まだ何年にもならぬ者です。バルトンとの出会いは、『朝鮮国真景』（1892年刊）という美しい写真集を残して海難事故で亡くなった、林武一という日本人外交官の調査からです。林武一は日本写真会の創立時（1889年）の65名のメンバーのひとりでした。しかも、「在朝鮮」としては唯一人の。ちなみに65名の内訳は、日本人が32名、外国人が33名です。外国人は東京または横浜在住者がほとんどですが、その顔ぶれの豪華さについてはここでは触れないでおきましょう。林武一-の消息を求めて、日本写真会の中心メンバーらしき小川一真、バルトンへと興味が移っていきました。

写真史の本では日本写真会を日本初のアマチュア写真団体と書いていますが、この表現は正しくありません。日本初の写真学会とすべきでしょう。第一の指導者はもちろんバルトンです。このことは、今後、日本写真会の会誌『写真新報』に毎号のように掲載されているバルトンの論説の分析によって明らかにされていく必要がありますが、今は、創立以来のメンバーである小倉俊司に、バルトンの偉さについて語ってもらいましょう。

「...バルトンという人は写真界では偉い人で、この人は、スコットランド人でありまして著書もありますが、この人が帝大の工科大学に居りました。この人の本で写真術のABCと云ふ本がありますが、この本は中々売れた本でありまして、独訳もあれば、仏訳もあります。その当時ロンドンのホトグラフィといふ写真雑誌に論説を始終書いて居りますが、そのバルトンの大学官舎に行くと見ますと、廊下まで一ぱい写真が掲げてありまして、驚きましたが、英国や海外に写真を送って、日本の写真界の報告等したものでありますから、非常に日本を紹介した人であります。...」（「写真界今昔座談会」、『写真

の今昔』昭和10年刊）

1891年11月の濃尾大地震の写真帖“*The Great Earthquake In Japan 1891*”（以後『日本の大地震1891』と表記する）はバルトンとミルンと小川一真という日本写真会の主要メンバーの手によって作られました。そのため『写真新報』の発刊に支障をきたしたことが、同誌35号（1892年3月刊）の雑報に出ています。

『日本の大地震1891』には初版本と再版本があります。おそらく1892年初頭に初版本が出版された後、100年の歳月を経て、下記の通り三つの異分野の研究団体から別々に、それぞれ由緒ある伝承本をもとに復刻されました。そのひとつ、三番目に出したのが日本下水文化研究会です。バルトン顕彰の広がり象徴する事柄でありながら、当事者にもあまり知られていないようなので、紹介させていただきます。

1992年9月、故武藤清東大名誉教授（建築学耐震構造）の旧蔵書をもとに、梅村魁、青山博之両東大名誉教授が、22×31センチに縮小して復刻。非売品。

1993年9月、故比企忠京都帝国大学工学部教授（採鉱学）の旧蔵書をもとに、地震予知総合研究振興協会から、原本を忠実に再現して復刻。旧蔵者は当時理科大学の学生として現地調査に同行、当写真帖の被写体にもなっている。本人の覚え書きあり。

1996年7月、バルトン旧蔵書をもとに、日本下水文化研究会が『明治・大正・現代 三大地震と人々の暮らし』の明治編に写真版と解説文の抄訳をつけて復刻。

以上の内、のみが初版本をもとにしておりとは再版本をもとにしています。初版と再版では、数種の写真に異同がありますが、そのうち最も注目されるのが、小藤文次郎の論文（理科大学英文紀要5号、1893年刊）に見開きで収録され、世界的に有名になった根尾谷の水鳥（ミドリ）断層崖の写真（のp.49）が、初版にはないという事実です。これをどう考えるか、ということが問題です。

この断層写真の撮影者は誰か、という議論は地震学の方でかなり以前からあります。間接的ながら当事者の証言もいくつか伝わっており、それらをすべて統合的に理解しようと思うと、コナン・ドイル氏に登場願いたいほどです。

さて、数ヶ月前、インターネットの「日本の古本屋」サイトに東京の古書店が、『日本の大地震1891』を14万円で出していることを偶然発見しました。2、3日毎日サイトを開いては、ため息をついていたのですが、ある日突然消えてなくなりました。どこに売られて行ったのか、今思っても残念でなりません。

濃尾地震の写真撮影した日本人写真師は何人もいます。彼らは地震による破壊の跡を精力的に記録し販売しました。しかし、バルトンの目は彼らとは違い、廃虚そのものよりもそこに生きる人間を捉えています。それが、今以ってこの写真集を見るものの心を打つ所以だと思えます。動く人間を撮影することは、長い露出時間を必要とし

た当時のカメラを以っては、技術的にもたいへん困難なことであったであろうと想像されます。

写真家としてのバルトンの評価は、今後確実に高まる

と思われます。バルトンの著書を収集し、そのうちバルトン撮影と推測される写真をインターネットで公開しませんか。海外からの反響もきっとあると思います。

シンポジウムのご案内

東本願寺が市民とともにできること ~いのちと自然のこれから~

「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」につきましては、ふくりゅう 28号、32号でお知らせしてきましたが、このたび、その取組みの第一弾として、下記のシンポジウムの開催が決まりましたので、ご案内いたします。この日程は東本願寺の修復工事開始を間近にひかえているなかで行われます。

なお、当会は趣旨に賛同し、実行委員会メンバーとなっております。関西在住の会員の方をはじめ、是非ご参加ください。

記

日時：2003年11月21日（金）午後6時～午後8時30分

会場：真宗本廟（東本願寺）真宗本廟視聴覚ホール
プログラム（予定）

17：30 開場

18：00 開会

<問題提起>

玉光 順正（僧侶・真宗大谷派教学研究所所長）

「いのちと自然のこれから - 親鸞聖人の教えから」

伊藤 延男（元東京国立文化財研究所所長）

「宗教建築の原点 - 御影堂からみる自然のイメージ」

村瀬 誠（雨水市民の会事務局長）

「いのちのはじまりとしての雨水」

板倉 豊（京都精華大学人文学部環境社会学科助教授）

「東本願寺再発見 - 環境問題を学ぶ場として」

19：40

<自由討議>

テーマ「東本願寺と市民がともにできること」

コーディネーター：

酒井 彰（流通科学大学教授・日本下水文化研究会）

20：30 閉会

■ 参加無料（定員350名）

■ 申し込み・問い合わせ先

参加ご希望の方は事前に・名前・住所・電話番号・メールアドレスなどとともに、「11.21シンポジウム参加希望」と明記の上、ファクスか電子メールにて下記担当者までお申し込みください。

- 気候ネットワーク内<担当/岡>

tel. 075-254-1011 fax. 075-254-1012

E-mail. kikonet@jca.apc.org

- 真宗大谷派（東本願寺）宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌本部事務室内：担当/蓮容（はすい）

tel. 075-371-9209 fax. 075-371-9222

主催：11.21シンポジウム実行委員会

■ 実行委員会参加・賛同（順不同、団体のみ記載）

特定非営利活動法人日本下水文化研究会、雨水市民の会、

特定非営利活動法人環境市民、特定非営利活動法人気候ネットワーク、京都・雨水利用をすすめる会、特定非営利活動法人きょうとグリーンファンド、カップ研究会、滋賀・雨水利用をすすめる会、特定非営利活動法人災害から文化財を守る会（予定）、宗教法人真宗大谷派（東本願寺）

■ 実行委員会後援・協力（順不同）

京のアジェンダ21フォーラム（予定）、京エコロジーセンター（予定）
以上9月30日現在

<メッセージ>

地球温暖化防止にかんする「京都議定書」が5年前に採択され、今年3月には「京都水宣言」が、ここ京都の地から全世界に向けて発信されました。「とてもすごいこと」なのですが、私たちの生活から見れば「どうもピンとこない」「ニュースの中の出来事」という感じになりがちではないでしょうか。

もし、「たしかに環境問題は深刻だと思うけれど、具体的に何をしたらいいのか?」「自分とどうかかわりがあるのだろうか?」などと思っている方は、まず、京都駅前の東本願寺で“自分たちができること”をいっしょに考えてみませんか?

例えば、少し東本願寺を見つめるだけでもいろいろな発見があります。東本願寺の周囲をめぐる堀や渉成園（枳殻邸）の池の水は琵琶湖から引かれていて、最近外来魚のブルーギルが大繁殖しています。東本願寺も琵琶湖の外来魚や水質汚染の問題とつながっていたんです。近代的なビルに囲まれ、そんな問題を抱えながらも、昔からのホタルやすっぽん、白サギの繁殖地でもあり、堀や池では様々な生きものが懸命に暮らしています。

また、かつての日本には樹齢何百年という松やケヤキ等の巨木がたくさんあり、その貴重な自然の恵みによって、108年前に世界最大の木造建築である御影堂が東本願寺に建てられました。昔の人は自然を大切に知る知恵で、お堂に巨木の樹齢以上に長く使える様々な工夫をこらして、調べてみると1000年以上もの使用に耐えうることが分かったのです。さらに建物としての寿命がきたときには、自然に還ることのできる機能をはっきりもっていました。

これまで何気なく通り過ぎていた日常の“あたりまえ”をあらためて見直すことが、実は全世界で起こっている環境問題や戦争の解決とつながっているのではないかと。いろんなことをみんなできいっしょに考えたい。私たち「11.21シンポジウム実行委員会」は、そんな願いをこめてこのシンポジウムを企画しました。

環境問題や東本願寺に興味のある方はもちろん、どなたでもお気軽にお越しください。そして、このシンポジウムを契機に、私たちが日常の忙しさのなかで忘れてしまっている多様な“いのち”や“自然”のすばらしさを、身近なところから発見していきたいと思っています。

(1ページから)オプションがあり、お金や労力を含めてどのような負担が必要かということを知らされたうえで、決定に参加するというプロセスが必要であると思います。また、メンテナンスの主体は地域の住民が主体的に行うとしても、専門能力をもった人材がかかわりを持ち続けることも必要でしょう。幸い、バングラデシュ国内でヒ素対策や農村開発に長期的に取り組んでいる日本のNGOもいくつかあって、地元に入って長期的に適正な対策を模索しています。一概にどの水源への変更が良いか悪いかではなく、地元の人に利益をもたらす対策があるとすれば、このような草の根的な活動によるものではないでしょうか。

日本下水文化研究会では、昨年スタートしたJICAの草の根技術協力事業への応募を考えています。そこでは、住民への裨益効果を定量することが求められ、地元の

人の利益になったことを検証しなければなりません。草の根事業の意義は、市民の立場から発想し、市民が参加することによって、また、本来利益を受けるべき人たちとの関わりをもって、その人達に利益をもたらすことにあると思います。

本会が財政的に困難な状況のなかで、幾多の困難も予想されますが、会員の皆さんの経験や知恵を活かす機会にもなります。多くの実践的参加者が集まることを信じ、進めて行こうと思っています。

バングラデシュで30年にわたり活動するNGOであるシャプラニールは、その定款で、「すべての人が持つ豊かな可能性が開花する社会の実現を目指す」ことを目的として掲げています。すべての人とはヒ素のリスクから解放される人たちであり、そのための活動に参加する我々でもあります。

運営委員会・事務局より

本号の記事にもありますように、本会では途上国の衛生改善のための技術支援を行うことを考えています。衛生的トイレの設置など、現地での活動を含めて行おうとしています。そのためには、JICAの草の根技術協力や地球環境基金による調査研究などへの申請を目指そうとしています。これらに採択されるためには、周到な準備が必要であり、組織として事業実施能力があるかどうかとも問われることになります。そこで、申請準備及び採択された後現地で活動できるメンバーを募り、プロジェクトチームを作りたいと思います。本会には衛生分野で海外への技術移転に値する優れた技術や貴重な経験、知恵をお持ちの会員も少なくないと思います。国内、国外での活動を問わず参加・ご協力をお願いいたします。

本年度の最も大きな事業である研究発表会の開催が近付きました。さいわい、助成金を得ることができましたが、本会の活動の基本的財源は皆様の会費です。今年度未納の方はこれを機に早急に納入いただきたく存じます。

岩手県から生活排水処理関係組織・団体が共催する「水環境と暮らしのフォーラム」への講師依頼がありました。人間の暮らしにとって最も身近なトイレの文化史、トイレ考等々についてという要望にお応えし、「トイレ考・屎尿考」の編著者である地田修一運営委員を推薦しました。10月18日(土)に花巻市総合体育館で行われます。

下水道博物館情報交流会議が10月30日に名古屋市で開催されます。今回は栗田彰評議員が「下水道博物館を想う」と題して講演を行います。本会は今年度から財政的支援は行いませんが、継続していけるよう支援していきたいと考えています。

本年度機関誌の編集作業は鋭意進めておりますが、発行は研究発表会後となりますことをお伝えするとともにお詫びいたします。

編集後記 ▶5面で紹介した東本願寺のシンポジウムでは、東本願寺が本格的な改修工事に入るにあたり、環境を考える資源に富んだ東本願寺というところで何ができるかを考え、次にそれを市民と一しょに実行に移すことを議論します。▶この段階では、本会会員の多くはあまり関心もてないのかもしれない。しかし、東本願寺の水の動き、とくに本願寺の消防のために敷かれている本願寺水道の存在とその現状を知るなかで、「環境」はつながっているのだということを確認できます。▶その後は、東本願寺での実践を通して、人のつながりをつくるために、京都下京区という地域のなかで東本願寺の果たせること、果たすことを考え、さらに京都全体、淀川水系全体の「水」について考えられないかと思えます。これこそ、日本下水文化研究会会員の方にとってふさわしいテーマであると思えます。そのような理由で参加・賛同団体となっています。



←都市の中の氾濫原、配水管が竹製架台で支えられているが、排水は行われていない。ボートで家に向かう人がいる。(ダッカ市内、9月7日)

ふくりゅう 通巻34号目次

第7回下水文化研究発表会・開催案内 草の根協力事業とNPO	1
第29回定例研究会のお知らせ 第24・25回し尿研究会例会のお知らせ 第22回し尿研究会例会を聴いて	2
「沙漠の国の上下水道」講演会に参加して 中川金治翁石祠建立募金の結果と今後の予定について	3
バルトンと写真	4
シンポジウム「東本願寺が市民とともにできること」案内	5

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町6-5
NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129
jade@jca.apc.org
aan63630@syd.odn.ne.jp

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください。
<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>